

チェックインしたときフロントにいたのは、ちょうど二週間前、ここを引き払うときに宿泊料金の精算をしてくれたフロントマンだった。こちらはすぐにそれとわかったが、先方はどうやら気づかないようだ。もつとも、商売柄、気づいても気づかないふりをするのが上手なだけかもしれないけれど。

「ご署名をお願いいたします」

カウンターごしに宿泊者名簿を差し出され、尾崎孝史は、足元にポストンバッグを置いてボールペンを手にとった。ぶかっこうでこつ軸のところに「風見印刷」という会社のネームが入ったものだった。そのボールペンは、客室のほうにもあった。つまり、ここの宿泊客はみな、一泊するだけで、ホテルで使われている伝票だの用箋だのの印刷を引き受けている会社かどこであるか、知ることができるというわけだ。そのことが、風見印刷にとつてもホテルにとつても、お客にとつても、果たして意味のあることなのかどうかは、大いに疑わしいと思うのだけれど。

孝史がペンを置き、提示された額の前払い金を支払うと、フロントマンが言った。

「お部屋のほうにご案内します」

「いや、いいです。わかるから」と、孝史は首を振った。「キーだけ下さい」

そのときのフロントマンの微妙な表情の変化で、あ、こいつもオレのこと覚えてるんだなど、孝史は悟った。知らん顔してるだけで、ちゃんとわかってたんだ。そりゃそうだろう、一泊や二泊の客じゃなかったんだから。

こいつ、腹の底では何を思っているのだろうと、孝史は想像した。おやこの受験生、また上京してきたな。今度も受験かね。でも、今日は二月も末に近い二十四日。国立はもちろん、私立大学の主立^{おもた}つたところの入試は、もうあらかた終わっているはずだ。すると、国立の二次試験を受けるのかな？ それとも首尾よく入学して卒業しても、履歴書の上では染^{しみ}み程度の価値しかないようなところでもいいから入らなくちゃならないと、悲壮な覚悟でやってきたのかな？ それとも専門学校かい？ それとも――

目の前に、ルームキーが突き出されている。孝史はふつと我に返って、それを受け取った。ポストンバッグを持ちあげ、一台しかないエレベーターのほうへ足を向けた。フロントマンはもう何も言わなかった。

ボタンを押し、エレベーターを待っていると、急に、首筋が熱くなるような羞恥^{しゆうぢ}心が襲ってきた。

こういうことばかり考えるのはやめなきゃいけない、と思った。会う人誰もが自分をバカにしているように感じるなんて、これはもう立派な被害妄想だ。しかも、そういう妄想にとらわれるたびに、反射的に脳細胞を総動員して、もしも相手が口に出して嫌味やからかうようなことを言ってきたら、さあどんなふうに言い返してやろうかと考えるなんてのも、ほとんどビョーキだ。

勝手に想像して、勝手に腹を立てている。こんなことを続けていたら、しまいは、

道端で通りすがりの誰かを包丁で刺すような羽目になってしまっただろう。そして駆けつけた警察官たちに肘をとられパトカーのほうへ引きずられてゆくあいだじゅう、「オレのことバカにしやがった！ あいつら、オレのこと笑ってやがったんだ！」とわめき続けるのだ。

おっかない、と思った。早く自分を取り戻さなきゃ。

古いホテルの古いエレベーターは、なかなか降りてこない。五階で止まったきりだ。あるいは業務用と兼用で、客室係がリネンやトイレトペーパーを載せたワゴンを押して乗り込み、ついでにそこで掃除までしているのかもしれない。

腕時計を見ると、午後五時を少しすぎたところだ。一階ロビーにはひと気がなく、物音も聞こえない。高級ではないが、静寂だけはたっぷりあるというわけ。それで助かった。もしこれで、フロントの奥の従業員控え室から、有線テレビの音が漏れ聞こえてきたりしたら、内装といい設備といい、故郷の町のはずれにあるモーターとそっくりになってしまつて、妙な里心がついてしまうところだ。

所在なくぼんやりとしていて、ふと、エレベーターの右脇の壁に、ぱつとしない観葉植物の陰に隠れるようにして掛けられている額縁が目にとまった。あれ、と思った。

前回宿泊したときには、こんなものに注意を惹かれることはなかった。それだけ、受験で頭が一杯になっていたのだろう。

飾つてあるのは、上下に並べて、揃いの額縁に納められた二枚の写真だった。かなり古いもののように、セピア色に退色している。上下どちらの写真も、キャビネ判に毛の生えた程度の大きさだ。

額縁のすぐそばまで近づき、観葉植物の葉を手でどけて、見あげてみた。

下の写真にうつっているのは、古風な洋館だった。中央に小さな三角屋根をのせた時計塔をはさんで、ほぼ左右対称の建物だ。二階建てだけれど、建物の両端には、それぞれ、屋根裏のような小部屋が設けられてあるらしく、そこだけ台形になっていて、丸窓が開いている。向かつて左手に煙突が見えるから、暖炉があるのだろう。モノクロだからわかりにくいけど、屋根の部分や窓枠は白っぽく、建物のほかの部分は赤煉瓦のようだが、あちらこちらに、煉瓦が欠けたり、黒くすすけて汚れたりしている部分が見える。古い屋敷なのだろう。細かく棧で仕切られた窓の内側に、うっすらと白くカーテンがかかっている。正面玄関は半円のアーチ型になっていて、そこに階段が数段。のぼると、観音開きのドアが待っている。前庭には芝生。植え込みが散らばり、いくらかピントがボケているが、小さい花壇もあって、ちらほらと花が咲いているのがわかる。

額の余白の部分に、金釘文字で書き込んである。

「旧蒲生邸 昭和二十三年四月二十日

撮影者 小野松吉」

蒲生邸。ということは、これは個人の邸宅だったのだ。博物館みたいな外観はともかく、それほど大きな建物ではないようなのは、それでうなずける。

それにしても、なんでこんな洋館の写真がここに？ という疑問は、すぐ上の額縁の写真を見あげると解けるようになっていた。

それは肖像写真だった。肩章けんしょうのついた軍服の胸に勲章を飾った初老の男性が、カメラに正対している。視線はわずかに上を向き、そのせいも、やや放心したような表情だ。被写体の男性は椅子に腰掛けていて、上半身しか写っていないが、それでも、輪郭のはつきりしたいかつい顔と、がっちりした肩の感じから、いかにも軍人らしい武張ぶばった雰囲気、十分に伝わってきた。

「陸軍大将 蒲生憲之のりゆき」

被写体の下に、そう書いてある。写真に並べて、同じ金釘文字の筆跡で綴つづられた長文の文書も掲げてあった。

「現在当ホテルの建っている場所は、戦前、陸軍大将蒲生憲之氏の屋敷があったところ
です。」

蒲生大将は、明治九年千葉県佐倉市さくらの農家の長男として生まれました。幼い頃から学業と武芸に優れ、地元の中学を卒業すると陸軍士官学校へと進み、さらに陸士卒業後、陸軍大学校在学中に日露戦争が勃発はつぱつすると、中隊長として前線にめざましい活躍を果しました。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。